



魔性義母の甘い尻しつけ

目次

継母との出会い	1
耳かきの誘い	19

登場人物

西岡直樹	小柄で華奢な体格をした内向的な少年。 素直で真面目、人見知りが激しい。
美紗	父親の再婚相手。スタイルのいい大人の美女。 明るく優しい女性だが……………。
西岡大地	直樹の父親。会社経営者。 当時部下だった美紗に熱を上げて再婚した。
西岡佳奈	直樹の姉。男勝りでサッパリとした性格。 現在は父と直樹のもとを離れて一人暮らしをしている。

魔性義母の甘い尻しつけ

魔性義母の甘い尻しつけ（体験版）

継母との出会い

式 フロン

高校二年の春、西岡直樹にとって大きな人生の変化が訪れようとしていた。父親の再婚。

現在、直樹は父と二人暮らしである。

直樹の父親である西岡大地はもうすぐ五十歳になる。

小さな会社の代表取締役をされており直樹が生まれてこの方、親子のコミュニケーションをろくに取ってこなかった。

それでも離婚して出ていった元妻に比べれば、だいぶマシだといえるだろう。

生みの親である女性は、直樹が幼くものごろつく前、若い外国人と不倫をして日本から出ていったという。

親権に興味を示さず実子を見捨ててロマンスに夢中になった女に、父は深い怒りと悲しみを抱えて離婚届に判を押し絶縁を言い渡したらしい。

その反動で父親は仕事にのめり込んでいき、息子である直樹の子育てや教育には不熱心、放任となった。

ただそのことに関して直樹は不満をもったことはあまりなかった。

なぜなら、小さいころから親の代わりにいつも姉が面倒をみてくれたからだ。

五歳年上の姉は男勝りな性格をしていたが、面倒見がよく利発で器用だった。

家事など身の回りの世話は小さなときから姉がしてくれていた。

加えて経済的には裕福だったため家族は生活面で困ることがなく、不自由なく生きていくことが出来ていた。

魔性義母の甘い尻しつけ

それに直樹が中学生になったときには離婚で傷ついた父親のメンタルも回復して、少しずつ親子で話ができるようになっていた。

そういう背景もあり、大学生の姉が一人暮らしをしたいと言いついた時も、父親も直樹も強く反対をすることなく表面的には快く送り出すことができたのだった。

男の二人暮らしでも何とかなるだろう、父親はそう言って姉の自立を後押しした。

姉がいなくなり父との慣れない二人暮らし。

直樹は寂しいと感じることもあったが、高校生にもなってそんな甘いことを言っていられない。

経営者である父の忙しそうな姿を見て育つたため、社会の厳しさをすでに学生ながら薄々理解していた。

そんな経緯で姉が出ていって一年経った現在――、

はじまりは夕食での父親の一言からだった。

「父さんな、また結婚することにしたよ」

父子でのわびしい夕食時、父親からそう告げられた直樹は箸を止めてしばらく沈黙した。

驚きや衝撃を受けたというわけではない。

ただ、すぐに受け入れることは出来ずに返答に迷ったのだ。

「えっ？　ほんとに？　それはおめでとう……」

結局いろんな気持ちを押し込めて、直樹が祝福の言葉を口にしたのは、すでに姉からそれとなく話を聞いていたからだだった。

半年ほど前から、父親に親密な女性がいるということは、ひとり暮らしをしている姉から電話で聞かされていた。

彼女の話では相手は父の会社の元従業員であり、明るい性格をした女性とのことだった。

父親の言動に怪しさを感じた姉が自ら探りを入れて判明したことを、直樹にこっそり教えてくれたのだ。

「あの様子だと、いつか再婚すんじゃないかな」　と軽く笑い飛ばしていた当時の姉の様子を思い返す。

魔性義母の甘い尻しつけ

あれから半年あまり、この時期に再婚するという父の決断に直樹は言葉とは裏腹に内心では戸惑いを覚えていた。

高校二年は難関大学を目指す直樹にとって翌年受験が控えている大切な時期だ。

「佳奈にはもう言ってる、アイツも喜んでくれてたよ」

「姉さんが？ そうなんだ……」

それだけ言うとは直樹は、動揺を隠すようにみそ汁の入ったおわんを口につけた。

姉は当初から新しい女性ができた父親に対して肯定的だった。

長年片親で育ててくれた父に対して感謝と負い目を感じていたのだろう。

ひとり暮らしをはじめたのもそのためであり、父親の新しい人生を心から歓迎しようとしていた。

「まっ、とーさんもまだ若いからねえ、アタシはアリだと思っよう再婚」

半年前にそんな事を言っていた姉を思いかえして直樹はどこか寂しい気持ちを感じた。

父も姉も自分の事をあまり考えてくれてはいない――、

そんな子供じみた考え。

自分だけが取り残されていくような感覚。

漏れ出しそうになったそれを押し込むように、直樹はみそ汁を口に流し込んだ。

感情を飲み込むように汁を飲んで口を開く。

「で、その……相手はどんな人？」

「ああ美紗、えっと名前は美紗っていうんだが、三十五歳でうちの会社の従業員だったんだよ」

「えっ、結構若いね、やるじゃん父さん」

父親との年の差に少しだけ驚いたが、大人の世界は色々な事情があるのだろう。

親の恋愛事情に対してあまり考えたくない直樹はとりあえずそれ以上はつつまないことにした。

「そうだな、俺にはもったいないくらい美人で気立てのいい娘だよ」

「へえ……」

魔性義母の甘い尻しつけ

のろけるように口元をゆるませる様子に直樹は父親が随分と、その女性に熱をあげていることに気が付いた。

普段のどこか表面的な態度とは違い本心のような言葉。

こんなによくしゃべる父親は久しぶりに見る、本当にその女性が好きなのだろうか…。

だが直樹が冷静に分析じみた事を考えていられるのもそこまでだった。

「ああ、だからきつと直樹とも上手くやっていけるよ」

「…？」

「まあすぐに母親として接しろとは言わないが…」

「えっ？」

その父親の口ぶりだとまるで――、

「ああ、一応来週からこの家に彼女には来てもらおうことになっている、最初は少し緊張するかもしれないが、」

「ちよっ、まっつて父さんっ」

まるで酔っぱらったように、よく口の回る父親に直樹は慌てて口を挟んだ。

「どうした？」

「それって僕たちと一緒に暮らすってこと？」

「まあそうだ、お前の義母はおやになる人なんだからな」

「いや、そんなの聞いてないんだけど…」

「ん？ そりゃ、今初めて言うからな」

なにもおかしいことなどない、なぜ息子がこんなにも焦っているのか理解が出来ないとばかりに父親は首をかしげた。

理解が出来ないと感じているのは直樹も同じだった。

生活環境が変わること、知らない女性と暮らすことなど人見知りの直樹には少なからずストレスを受ける暮らしになるだろう。

「結婚は賛成だし特に文句もないけど、…急に一緒に住むなんて準備ができてないよ？」

「いや、だから来週までに迎える準備をしようって父さんは言ってるんだ」
そうざらりとやってのける父親。

直樹は長い年月をかけて広がっていった親子の溝をヒシヒシと実感した。

魔性義母の甘い尻しつけ

準備とは気持ちの問題であり物理的な意味ではない、だがそんなことを説いても理論主義者である父には通用しないだろう。

こうなればもう正論で正すしかない、直樹はこの際もうハッキリと言うことにした。

「とういかなんで今の時期なのさ？ 僕、来年受験だよ」

責めるような目つきで正面の父をみる。

「それに一年間は父さんと問題なく暮らしてきたのに、いきなり新しく女の人がかかるなんて……」

不満と不安を込めて言い放った直樹に、父親はゆっくりと口を開いた。

「まあ、それなんだが……」

頭をかいて軽く視線を落とす。

その様子はすでに答えを用意しているように直樹には感じられた。

「近頃、俺もお前もロクな食事食べてないだろ？」

そう言って父はテーブル上にある貧相なレトルトの肉じゃがを箸でつついた。

「……？」

話が見えてこず、直樹は眉をひそめる。

「……まあ、聞いてくれ」

そんな息子に父親は、珍しく顔をあげて目をしっかりと合わせてきた。

「娘にも言われていたことなんだが、美紗に顔色が悪いと指摘されてな」
自虐のまじった口調で言葉を続ける。

「その原因が、この男二人暮らしの生活にあるって怒られちゃったんだよ」
冷めたジャガイモを箸で割ると父親は軽くため息をつく、たしかにその顔は、お世辞にも血色がいいとは言えなかった。

「お前も一緒だろ？ ここの所あんまり元気そうにみえないぞ」

そうこぼした父親に直樹は、元氣じゃないのは急に再婚報告と同居をいきなり強要されているからだよっ！ と叫びたくなかったが、

——やめた。

魔性義母の甘い尻しつけ

「そうかもね……」

代わりに力なく相槌をうつ。

顔色がよくないというのは実際に学校の友達や同じ塾生にも度々言われていたことだった。

そもそも直樹はこの年頃にしては小柄で華奢きゃしゃな体つきをしており、あまり健康的とは言えない肉体の持ち主だ。

そして、ここ一年は特にインスタントやレトルト中心の生活が影響を及ぼして更に不健康に見えていたのは否定できなかった。

自覚もあり、父の話の流れがだんだんと見えてくる。

こんな事になるなら姉の提案を受け入れておくべきだったと後悔する。

度々料理を作りに戻ってあげる、と言っていた佳奈に心配をかけまいと拒んでいた自分に腹が立つ。

おそらく父親も自分と同じように娘に心配させないように強がって断っていたのだろう。

その結果が今の不健康な男二人暮らしにつながっていったのだ。

「美紗に今の生活の事を話したら、俺だけじゃなくてお前の心配までしてくれてな」

チラリと直樹を見てから室内を見渡す。

「家事なんかもしてくれてるっていったよ」

「そう……なんだ……」

好きな男ならともかく、会ったこともない義理の息子になる男にそこまで気にかけるだろうか？

直樹はそんなことを考えたがそれこそ本心などわかるはずもない。

「今の時期に病気にでもなったら困るだろ」

「……………」

直樹はなにも反論を考えつくことが出来ず黙り込むしかなかった。

「そういうことで、まあ一つ家族として迎えてやってくれないか？」

最後にうまくまとめるようにそう口にした父親に、これ以上ごねる理由も気概もなく直樹は小さくうなずくしかなかった。

魔性義母の甘い尻しつけ

「まっ、佳奈がいなくなってからこの家はだいぶ広く感じていたからなあ、ちようどいいんじゃないか」

「そう、……カモネ」

たしかに父親のいう通り姉がいなくなってから、この3LDKのマンションに二人暮らしは持て余し気味で寂しさを感じるが多かった。

「きつとすぐに慣れるさ、美紗、——義母^{かあ}さんは明るい人だからなっ」

「そう、だといいいね……」

だがだからといって、見も知らずの人間といきなり一緒に暮らすというのはシャイな直樹にとって素直に歓迎できるものでもないが……。

ましてや母親ができるなどという実感などまったく沸かなかった。

結局父親の——、いや正確には義母になる女性が決めた同居暮らしを拒否出来ずに、直樹の新しい生活がはじめることが確定した。



一週間後、初めての顔合わせとなった休日の昼下がりに。

自宅マンションのリビングで新しい義母^{はは}(になる予定の女性)を迎えた直樹は衝撃を受けていた。

「こんにちは、はじめまして美紗といいます」

その女性は直樹の想像よりはるかに若々しく垢ぬけていて、なにより美人だった。

「おい、直樹っ」

「あ、ど、どうも直樹といいます……」

思わず見とれてしまっていた直樹は父親にうながされて慌てて挨拶をかえす。

父の再婚相手はオシャレで大人びた美女だった。

明るい色をしたセミロングの髪、切れ長の目と淡い桃色の唇の柔和で色っ

魔性義母の甘い尻しつけ

ぼい顔立ち。

肩回りをみせた黒ニットのセーターと形のいいヒップがわかるショートパンツを着こなしている。

とりわけ豊かなバストと形のいいヒップに目を見張る。

彼女のとても三十代とは思えないその姿に思春期の少年は強く“女”を意識させられた。

これまでの人生で合ったことのないほど、ジワリとした存在感のある女性。学校の女子にはない余裕のあるオーラ、若々しくもあふれ出す大人の色香に魅了される。

目をくぎ付けにするような肉体に直樹は見てはいけないものを見るようにチラチラと視線を彼女へと送ってしまった。

そんな不自然な視線を向ける直樹に女性は微笑ましそうな笑みを向けた。

「あら、お父さんから聞いてた通りちよつと人見知りサンなのかな？」

楽しそうにそう尋ねてきた彼女の声は女性にしては低めながらも柔らかさを含んでいる。

ニコニコと笑い近づいてきた美紗に、直樹は慌てて視線を下げた。

「べ、別にそんなことは……」

心臓を高鳴らせてそう答える直樹に美しい顔が寄ると、甘い香りが微かに鼻をくすぐった。

「これからよろしくね、直樹くん」

ささやくように優しく声をかけると美紗はスラリとした白い手を差し出した。

「お願いします……」

そう言っただずと腕を出した直樹に、美紗はにっこりと微笑むと手を握って大きさに上下に振った。

「っ……!!」

想像以上に力が強く引つ張られるように直樹の身体がゆれる。

それに近くで対面すると美紗のほうがかかなり背丈が高い。

成長期から乗り遅れた華奢な少年より、成熟した肉体をもった彼女のほうが全体的に体のサイズ感が大きく、力も強く感じられた。

魔性義母の甘い尻しつけ

「手がちっちゃいね？ カラダも……、なんだか女の子みたい」

相手もそう感じたのだろう、握手をしながらからかうように言った美紗に、直樹は軽く口をとがらせた。

「……そんなことないよ」

「ごめんごめん冗談よ、仲良くしようね直樹クン」

そう言っつて顔をのぞき込むように笑いかけてきた表情に、悪意のないからかいだと気づく。

直樹は恥ずかしそうに笑みをかえしてうなずいた。

「こちらこそ、……デス」

そのとき、わずかに頬を染めて視線をおとした直樹を見て女の顔が一瞬だけ変化した。

明るいさわやかな笑顔から唇をつり上げた艶のある微笑みに……。

その表情はすぐに立ち消えた、この場にいる親子二人に気づかれることもなく……。

「よし、これで家族の一員だねっ」

二人の挨拶に、父親である大地はノーテンキに両手を叩くと声をあげた。妙に大げさな言葉がリビングに寒々と響く。

「ちよつとせつかちじゃない？」

「……恥ずかしいよ、父さん」

二人の緩衝材になろうとガラにもなく明るく振る舞おうとする父親に、美紗から冷静なツッコミが入り、息子からは苦言がもれる。

「いやそんな冷めた言葉……」

二人からすげない反応をされた父親は軽くうなだれた。

「ちよつとクサかったわよ、ね？ 直樹クン？」

「……うん、かなり」

口をそろえて父親の言動をからかう二人。

「待て待て、変な所で気を合わせるなっ」

無理をして道化キャラを演じる痛い大地の姿に、美紗と直樹は顔を見合わ

魔性義母の甘い尻しつけ

せるとお互いに小さく笑いあった。

口をおさえて笑う美紗の姿に直樹は心の中でホッとしていた。父親の再婚相手は想像よりも若く魅力的な女性だったため、最初は戸惑った。

だがいたずらっぽさも持ち合わせているのを知って安堵する。

義母というよりどこかお姉さんみたいな雰囲気だが、気を使えて良識もありそうな人なので、険悪にはならないだろう。

不安ばかりに感じていた同居生活に直樹は少しだけポジティブな感情を持つことができたのだった。



三人での共同生活がはじまってすぐに美紗は正式に直樹の義母ははおやとなった。もともと二人のあいだで、籍を入れる日には決まっていたらしく父親と美紗で役所に行き、すんなりと手続きを済ませていた。

直樹としてもいまさら特に反対する意思もないので半ば他人事でそれを受け入れた。

そうして母親が出来たなどという実感もなくはじまった共同生活だったが、こちらは他人事のようにはいかなかった。

暮らしが一変したからだ。

春休み中だった学生の直樹は、基本的に家にいる時間が長い。

父親は仕事で家を空けるため、自然と義母と二人になる時間が長くなった。

まず朝起きて朝食が用意してある、そして昼食、夕食、洗濯やお風呂の準備、掃除などすべての家事を美紗がやってくれていた。

いままでは、ろくに朝食もとらずに家事も適当、

姉がいたときは姉任せだった直樹にとってすべてが他人にキッチリと用意されている生活に中々慣れることができなかった。

一日のうち、ほとんど家にいない父親はありがたがっていたが、直樹としては申し訳ない気持ちも抜けなかった。

魔性義母の甘い尻しつけ

そして、彼女は知れば知るほど完璧な女性だった。

普段の家事どころか筋トレやエアロビクス、美容やファッションにメイクと自己研さんに余念がないのが伺えた。

姉もそれなりに綺麗でオシャレだったが、美紗に比べれば女性としてのステージが違うと直樹には感じられた。

家事と自分磨きを完璧にこなす美女、そんな彼女の直樹に対する態度は気さくだった。

食事の好みを聞いてきたり、学校の課題を教えようとしてきたり、ことあるごとに話しかけられた。

はじめは気を使って打ち解けようとしてくれていたのかと思ったが、しばらくすると、それもどうも違うように感じてきた。

最初から親しげに接してきていた彼女ではあったが、日を追うごとに露骨にボディタッチやなれなれしい言動が増えてきたのだ。

「お母さんのこの服どうかしら？」 「直樹くんは彼女はいるの？」 「眉毛ももう少し細くしたらカッコイイよ？」 「爪きってあげよっか？」 等々。

日々距離をつめてくる彼女の言動に直樹は戸惑い、次第にわずらわしさすら感じるようになっていった。

美しい女性にそんな風に親密にされたら嬉しい男も多いだろう。

だが内気で人見知りの性格の直樹からすればあまりにも急激な距離のつめ方だった。

わざとらしいほどの優しさ、媚びをうるような甲斐甲斐しさ、そして時折みせる女のあざとさに直樹はだんだん違和感を抱くようになっていった。

息子と親しくしたいと思うには不自然すぎるほど露骨な優しさ。

直樹にとってそれは親密になりたいという域を超えているように思えた。

そうして彼女が踏み込んでくるのを感じるのとは逆に、直樹は彼女から距離を置くようになった。

それから直樹は、義母と二人きりになる時間をなるべく減らすようにして

魔性義母の甘い尻しつけ

いった。

実際の過ごし方として、まず朝食は早起きして必ず父親と一緒に食べる。午前中は自室にこもり学校の課題やゲームをして過ごす。

父親が仕事にでかけていない昼食時、これが直樹にとってかなりキツイ時間だった。

美紗と二人っきりで会話しなければならないのだが、直樹は自分から話を振ってやりすごしていた。

義母からプライベートな質問を受けるのを避けるためだ。

話題の中心を父親にすえて適当に会話をして食事を終わらせると、午後はそそくさと家まで塾や図書館に出かけていた。

夜はなるべく遅く父親が帰る時間まで粘って何とか三人で夕食をとって、最後にお風呂に入って寝る。

そんな息苦しさすら感じるような壁を張った生活を直樹は送るようになっていた。

それが内気な直樹の自分を守るための本能的な処世術だった。

「直樹くん今日も帰りは遅くなるのかしら？」

ある日、昼食を終えて逃げるように家を出ようとした直樹に玄関口で美紗から声をかけられた。

かかとを叩いて靴をいれた直樹はチラリと振りかえる。

「えっと、わかんないけどなんで？」

意図の見えない質問に警戒するような言葉がでてしまう。

「今日は塾がない日よね、お父さん遅くなるみたいだから遅いなら私、先に食べてもいいかしら？」

そう言った美紗の表情はいつものように柔らかかった。

だがその柔和な顔が仮面のように感じられて直樹は逃げるように目をそらした。

「いいよ別に……、あまり僕に気を使わないでね美紗さん」

口早にそう言い残すと直樹は逃げるようにドアを開けて玄関から出ていった。

魔性義母の甘い尻しつけ

ガチャリとドアが閉まる。

「……そう、ならもう気をつかわないことにするわ」
ドアのむこう側で、つぶやいた女の言葉はもちろん直樹に届くことはなかった……。

その日、夕方遅くに帰宅した直樹はリビングにラッピングしてある夕食を見て安堵した。

義母はどうやらひとりで夕食を取り、両親の部屋にいるらしかった。

父親はまだ帰ってきていないようだったので、自分の分を電子レンジで温めると食事をとった。

久しぶりのひとりでの食事を手早くすませると、お風呂に入り自室へともどる。

その後、部屋で二時間ほど塾の宿題をして終わらせるとゴロリとベッドへと寝そべった。

ふうと軽いため息をつく。

やはり他人がいる生活は中々慣れることはない、気を使ってしまう。

自室にいる時以外は常に義母が一緒にいるという妙な緊張感があった。

「^{ナオ}直樹あんたねえ、気い使ってるのはむこうのほうだわ」

寝そべりながら昼間、電話した姉から言われた言葉が脳内によみがえった。思い返しながらか直樹は思わず口をとがらせる。

（^{ひとごと}なんだよ他人事みたいに……）

ひとり暮らしの姉に、今のモヤモヤとし気持ちをわかってもらおうと相談したが、取り合ってもらえず逆に軽く説教をされてしまった。

姉に言わせれば女性が親しく距離を詰めてくるのは不安の裏返しで、早く自分の居場所をつくろうと必死なのだという。

「アンタが不安になってどうするっ」

と喝を入れられた直樹は失敗したと悟った、相談する相手を間違えた。

どうやら姉は義母と何度か連絡を取っていてすでに色々直樹と父のことを話していたらしい。

魔性義母の甘い尻しつけ

女同士分かり合うこともあったのだろう姉は義母に強い好意をもっているようだった。

昔から姉に逆らえなかった直樹は、電話したことを後悔したが時すでに遅し、延々と逆説教を聞かされる羽目になったのだ。

まあ、サッパリとした姉の性格から慰めや素直に愚痴を聞いてくれることを期待した自分が悪いのだが……。

(はあ、もうどうでもいいや)

悶々とした気持ちを抱えた直樹はベッドに寝そべりながら、とりあえず気分を変えることにした。

横にあるスタンドラックへと手を伸ばしてヘッドホンを目へと装着すると枕元にある端末を手にとった。

昨年にお小遣いを貯めて買った液晶タブレットだ。

指先で画面を操作してアプリをタッチしてお気に入りの動画サイトを開く。

そのまま枕元にタブレットを立てかけると、うつ伏せになり指先で再生ボタンを押した。

動画の画面に和装をしたバストアップの女性が映しだされる。

それは直樹が癒されたいときに見て聞く、音声動画だった。

映像の女性はダミーヘッドマイクという耳を模したマイクに耳かき棒を入れて音を鳴らしている。

視聴者に対して女性が優しく語り掛けながら、耳かき棒で心地のいい音を鳴らして、まるで耳かきをしてくれているような気分させてくれる、

通称“耳かき動画”と言われるものだ。

この手の動画は色々あるが、特に直樹が気に入っているの年上の女性が甘えさせてくれるようなシチュエーションの動画だった。

今聞いているのもそうだ。

ひそひそと囁くような小声で疲労をねぎらうような言葉と鼓膜に直接響くようなカリカリとした擬音が重なる。

魔性義母の甘い尻しつけ

それをヘッドホンで聞いているだけで抱えている悶々とした気持ちや緊張感が和らいでいくのが感じられるのだ。

(やっぱり落ち着く、もう現実なんて……)

姉が引越してから直樹はさみしさを埋めるようにこの疑似的な体験にはまっていた。

作り物だとわかっているけどその時だけは、甘えられているような気分になり癒されるのだ。

この閉じられた世界で密やかな声と音に身をゆだねると現実を忘れてぼんやりとした気持ちよさがおとずれてくる。

そして今日もまた、直樹は一日の気疲れを癒すようにヘッドホンで音声を聞きながらウトウトと意識を手放そうとしていた……。

——コホンッ

ビクッと直樹は思わず飛び起きた。

外部から、突如響いたリアルな物音に我にかえる。

ベッドの上で急いでヘッドホンを耳から外すと音がした方へと顔を向けた。

「——！！！！」

「へえ、なかなかイイ趣味してるね直樹くん」

心臓が止まるほどの驚愕。

視線の先には、ベッドの傍に立つ義母である美紗の姿があった。

厚手のガウンを羽織って顎に人差し指を当てながらその視線はタブレットの画面をマジマジと見つめている。

「なっ、ちよっ！」

直樹は慌ててタブレットを枕元に伏せると、腰を立てて抗議するように美紗をにらみつけた。

「なに勝手に入ってきてるんですかっ」

「あら、ちゃんとノックはしたわよ？」

語気を荒くして咎めた直樹に、美紗は動じる様子もなく薄く微笑んだ。

「何度もノックしてから呼んだんだけど、まったく返事がないから困ったわ」

魔性義母の甘い尻しつけ

「そ、それは……」

直樹の反射的に出た憤りは義母の理に沿った言葉によってしぼんでいく。たしかにヘッドホンをしていたのと眠気におそわれて気が付かなかった、それは自分の落ち度と言えるかもしれない。

「うゝん？ 何かあったら困るしで、勝手に入っちゃたわ」

「な、何かって何ですか？」

あごに指を当てたまま首をかしげる義母に、直樹は反射的に聞き返した。

「ほら、私まだ直樹クンのこと何も知らないし持病とかあって倒れてたら怖いじゃない？」

もつともな理由だが、いまだ反発心の消えない直樹はうつむいて抗議した。

「そ、そんなの父さんに電話すれば……」

「大事な仕事中に、かしら？」

「うっ、……」

「ただ部屋に入って確認すればすむことを、大地さんにわざわざ確認のために連絡するのもどうかと思うのよね」

思わず反論したが、彼女の言う通りそんな事で仕事中の父に電話をするなんて大げさすぎる。

言葉につまった直樹はこれ以上何を言っても正論で返されると悟った。

「ううっわかりました……」

くすぶった憤りがしぼんでいき、代わりに恥ずかしさがわいてくる。

耳かき動画を聞いているところを見られたという羞恥。

思春期としては小さくないダメージを負い、早くそんな状態から抜け出したいと直樹は口を開いた。

「そ、それで何ですか？ 何か用ですか？」

さっさと出て行ってほしい、そう意思を込めて口をとがらせる。

すると義母は微笑みを崩さずに、片方の手を前へと突き出した。

「ああ、そうそうコレ」

最初から後ろ手で隠し持っていたであろうそれを、見せつけるように指先にひっかけて持ち上げる。

指から垂らしたその布地には見覚えがあった。

魔性義母の甘い尻しつけ

「洗濯もの、お父さんのかアナタのかわからなくて、どっちのかしら？」
つぶやきながら揺らしたモノは男物のボクサーパンツだった。

「そ、それっ」
答えようとした直樹の眼前でつり下がったパンツがブラリと揺らされた。
「サイズも同じくらいだから見分けがつかなくて、教えてくれる？」
そう言うと美紗は、自身の整った鼻先に男物のパンツを近づけた。

軽く息を吸うように鼻音を鳴らすと、
「あんまり濃いニオイはしないわね」
クンクンっと匂いをかぐしぐさをして小さくつぶやいた。

「でも、ちよつとすっぱいかしら」
「——なっ、！！」
目を細めてどこか吟味するように股間部分に鼻を近づける美女。

その見たこともない色っぽい顔つきといやらしさを感ずる仕草に、少年は
衝撃を覚えた。

「ふふっ、……くさい」
啞然とする前で義母は妖艶に微笑んだ。

「——ば、僕のですっ」
羞恥で顔を赤らめた直樹が焦ったように下着を奪おうと手を伸ばす。
だがそれより早く美紗はヒョイツと腕をあげてそれをかわすとクルクルと
パンツを指に巻き付けていった。

「あらそう？　ありがとう」
腰に手を当てて軽やかにそう言うのけ、慌てる直樹をニンマリと見つめて
口を開いた。

「大丈夫よ直樹くん、ちゃんと洗って返してあげるから」
「~~~~っ」
羞恥があふれ益々顔を赤くさせる少年。

状況を楽しむようにならかうように口にした美紗の態度に呆然とするほかに
ない。

明らかに今までとは様子が違う彼女に心がついていけなかった。
「一応それが聞きたかったダケ、お邪魔したわね」
いまだに衝撃から立ち直れていない直樹に、美紗は微笑みかけるとゆっく

魔性義母の甘い尻しつけ

りと部屋の入り口へと向かっていく。

そしてドアをあけると振りかえりいたずらっぽく片目をつぶると口を開いた。

「ああ後、ドアにはちゃんと鍵をかけなきゃダメよ、恥ずかしいコトしているときは特にね♪」

弾んだ声でそう言い残すとボタンとドアが閉じられて義母が出ていく。

直樹はしばらくその場でかたまっていたが、数秒後勢いよく顔をベッドへと突っ伏した。

怒り、羞恥、戸惑い、忌まわしき様々な感情がグルグルと脳内を駆け巡る。

あれが義母かのじよの本性なのだろうか？

だとするとあまりにも自由で、なにより……、

自分の想像をはるかに超える彼女の姿に言いようのない不安があふれでる。

それでも直樹は、自分に言い聞かせるように今の出来事はまだマシだったかもしれないと考えた。

たしかに耳かき動画を聞いているところを見られてしまったが、エッチなコトをしている最中ではなかったのが幸이었다。

あまりよくない事だとわかっていてもたまに悶々としてオナニーをしてしまふことがある。

その最中に今のように彼女が入ってきていたら、とんでもないことになっていた。

次からは彼女の言う通り部屋に居るときはしっかりと鍵をかけておこう。

直樹は入り口まで歩いていくと内から鍵をかけた。

それにしてもやっぱり義母はどこかおかしい……。

これからも彼女とは親しくせずにある程度距離をおいて付き合おうと、あらためて決意する。

その後、ベッドに戻った直樹はなかなか寝付くことが出来ない一夜を過ごした……。

耳かきの誘い

翌日の朝、直樹はいつものように父親を見送ると自室へと閉じこもった。眠たい目をこすりながら勉強をしていると、ドアがノックされた。

「直樹くん、ちょっといいかしら？」

義母の声が聞こえてきてギクリと身をこわばらせる。

書きかけのノートにシャーペンシルをおいて恐る恐る返事をする。

「は、はい、なにか……」

「お話があるからリビングまで来てくれると助かるわ」

彼女はドアの外からそう言い残すと足音を立てて立ち去っていく。

たったそれだけのやり取りだったが直樹の心拍は急激にはね上がった。

間違いなく昨日のことが関係しているだろう。

何も悪いことはしていない、そう自分に言い聞かせてもあふれ出る不安を抑えることができない。

無視することもできず、直樹は重い足取りで部屋をでると廊下を歩いていた。

リビングに顔を出すと、ソファに腰をかける美紗が声をかけて手招きをした。

「ほら直樹くん、こっちに来てここに座って」

微笑みながら自分の隣の空いた空間を手で撫でさする。

白いノースリーブのシャツにゆったりとしたロングスカートをした彼女は

昨夜とは違い、いつものような柔らかな笑みを浮かべていた。

「えっと、話って……」

彼女の行動に警戒しながら、直樹は立ったまま話しかける。

説教だろうか？ それとも昨日の続きのような事をされるのだろうか？

警戒心が膨らんでいく。

そんな直樹に美紗は無言で見つめながらソファをゆっくりと撫で続けた。

そのしぐさに無言でここに座れという意図を感じる。

直樹はソファをゆっくりと撫でながら柔らかな笑みを崩さない義母の表情

魔性義母の甘い尻しつけ

から圧を感じ取った。

「……………」

しばらく沈黙が続き、結局その空気に耐えきれなくなりしぶとソファの端へと腰をおろした。

義母の指定した隣ではなく離れた場所に身をこわばらせるように小さくなつて座る。

おびえた小動物のような直樹の態度に、美紗は首を傾けて苦笑するとゆっくりと口を開いた。

「ねえ、直樹クン耳かきしてあげよつか？」

笑みをたたえてそう口にした義母に、直樹はすぐ返答できず彼女へと視線を送った。

「……………」

「どう？」

柔らかく微笑みながら聞いてくる彼女の手には、いつの間にか細い耳かき棒が握られていた。

「ど、どうって言われても……………」

まさかの提案に、戸惑い口をにがらせる。

「ど、どうして……………」

「昨日、見た音声動画？ こういうのが好きなのよね？」

ゆらゆらと梵^{ぼんてん}天の付いた耳かき棒を指先でつまんで揺らしながらおかしそうに笑う。

「やってあげるわよ？」

そのしぐさにどことなく昨日のパンツをゆらし、からかわれた事を想起させられて心拍があがる。

やはり、からかわれているのだろうか？ どちらにせよあまりいい感じはしなかった。

「い、いや、いいです、大丈夫です」

義母のどことなく漂わせている妖しい雰囲気を感じた直樹は下を向いて拒絶した。

「あら、遠慮なんてしないでいいわよ？」

「いえ、遠慮じゃなくて……………」

魔性義母の甘い尻しつけ

真意はわからないがこれ以上踏み込んでしまうと、何やらとんでもない事がおきそうな予感がする。

断る意思を見せる直樹に義母は身体を寄せた。

「遠慮じゃないなら、どうして？」

「別に、必要ないから……デス」

にじり寄るように腰をずらして近づいた義母から逃げるように直樹もさらに腰をソファの端へと寄せる。

そんな直樹の様子に苦笑いを浮かべると義母は口をひらく。

「ふうん、だったら昨日の変な動画は必要なのね？」

「なっ——」

昨夜の耳かき動画、それを持ち出して言及された直樹は焦った声をあげた。

「動画はよくても母親の耳かきは拒否するんだ？」

「う、それは……」

「実際の耳かきより動画の音声だけ聞いて満足してるなんて——、」

問い詰めるように真剣なまなざしへと変わった義母が言いつのる。

「変じゃないかしら？」

「そ、そんなこと……」

「そうでしょ？」

首を傾けて目を見据えて尋ねる。

「耳かきがしてほしいわけじゃないなら、どういう理由であるの動画を見ていたのかしら？」

「うっ、ううっ」

淡々とした口調でそう質問されて直樹は下を向いて口ごもるしかない。

正直に現実を忘れて、甘えたい癒やされたいからなどと言えるはずもなかった。

「言えないのかしら？」

「そ、それは……」

上手い言い訳もすぐには思い浮かばずに頭の中でどうしようかと思考だけが空回りしていく。

魔性義母の甘い尻しつけ

そんな直樹に向かって、腕を組んだ義母は独り言のようにつぶやいた。
「だったらお父さんに、そうねえ、……そうだわ佳奈ちゃんにも相談してみようかしら？」

「っっ！」

昨夜の件を父と姉へ報告すると言い出した義母の言葉に直樹は焦った。

そんな事になれば二人から変な目でみられるかもしれない。

実母がいなかった事により歪んでしまったと、父と姉に思われるのはイヤだった。

別にできた息子、いい弟だと思われないわけではない。

ただ母親の愛情が足りなかったと思われるのだけは避けたかった。

そうやって長らく生きてきたのだ、今更甘えたい欲望を家族に知られるのはゴメンだ。

「み、美紗さんそれは、ちょっと——」

「あら、じゃあやっぱり耳かきを試してみる？」

慌てて顔を向けた直樹に美紗は満面の笑みでそう提案した。

——有無を言わせない無言の圧力で。

「は、はい……」

心理的に追い詰められた直樹は弱々しくうなずいて言う通りにするしかないことを悟った……。



「そう、そうやって横になって寝転んで……、はあい頭はココよ」

耳かきを片手に、ソファーに座った義母は自らの太ももを叩くと優しい声で膝枕をうながしてきた。

半ば強要されるような形になった耳かき、直樹は警戒するように恐る恐るソファー身体を横たえていった。

義母のおなかの反対側、正面を向くようにして横顔を柔らかい太ももへと乗せる。

魔性義母の甘い尻しつけ

生まれて初めての耳かきであり膝枕、スカートに覆われた膝の感覚は想像以上に柔らかく感じられた。

視線を向けると目の前にテーブルがある。

その上には、いつもは置いてないウェットティッシュがあり義母がこの状況を準備していたことが察せられた。

彼女による作為的なものを感じ取り自然と身がこわばってしまふ。

ギョッと膝をおり足の指を丸めた直樹に美紗の柔らかな声がかからふってきた。

「大丈夫よ直樹クン力を抜いて…：優しくしてあげるから」

ささやかかれて、こめかみ辺りに温かい感覚が生じる。

義母のなめらかな手のひらが優しくひたいを撫でていた。

「少しずつでいいから膝枕に慣れていこうね」

じんわりとした人肌の温もりにもふれて緊張をほぐすようなゆったりとした声が耳に流れ込む。

その声色は硬くなった身体を緩めるような柔らかかで自然な響きをたたえていた。

彼女はもう片方の手を机に伸ばしてウェットティッシュを二枚ほど引き抜いた。

一枚をソファアのひじ掛けに広げると、もう一枚を手にもつ。

「少し冷^{ひゃ}ッとするけど我慢してね、ちよつとだけ耳のまわりをキレイにしよっか？」

前もってそう伝えられると、ヒヤリとした湿った感覚が耳にはしった。

「ひゃっ」

「大丈夫、大丈夫すぐ終わるからね〜♪」

あやすように義母はそう語り掛けると、丁寧^{がいじ}に外耳をティッシュでぬぐっていった。

腕を胸の前に寄せて身体を強張らせていた直樹だったが、冷たくも丁寧な手つきで耳を拭かれる感覚に次第に慣れて心地よさを感じはじめた。

しばらくすると耳全体がぬぐい終わったのか、感覚が耳から離れていった。

「はい、外側はキレイになった」

魔性義母の甘い尻しつけ

サッパリとした声と一緒にスースーとした清涼感が耳に感じられた。初めて本物の女性に膝枕をされて耳を掃除される感覚。

その伝わってくる息遣いに直樹は音声動画との差をハッキリと感じ取った。
圧倒的な現実感。^{リアリティ}

それは決してイヤな感覚ではなかった、いやそれどころか――。

「じゃあ次は、本命の耳かきをするね」

耳を揉むように柔らかくつままれる。

「中は、うくん……、少し耳垢がたまってるかも」

そのまま軽く引っ張られると、耳の奥をのぞき込んだのか義母がそう口にした。

「自分で耳かきはやってないの？」

「う、うん」

「そう……」

直樹が気まずげに返事をかえすと、義母は小さくつぶやいて耳かきをゆつくりと耳穴へと入れていった。

「……っ」

一瞬ビクリと身体を硬直させた直樹だがすぐに力を抜く。

耳かき棒は慎重に穴にふれると最初にやさしく、徐々に慣らしていくように浅いところから丁寧にすすっていった。

カリカリカリッと穴の表面を優しくなぞるように細かくこすられる。

その感覚はまったく痛みを感じることがなく、それどころかここのよさを直樹の耳にあたえていく。

（なにこれ、凄く気持ちいい……）

直樹は素直にそう思った。

たった数分だが義母の耳かきが上手いことだけは理解できる。

今まで耳かきなどされたことがなかった、他の人でもこんなに気持ちよくなれるのだろうか？

そんなことを考えながら、ぽおーとした頭に再び温かい手がふれると撫でるような手つきでやさしく髪が梳^すかれていく。

義母の華やいだ甘い香りが鼻をくすぐり、警戒心は少しずつ崩れ落ちてい

魔性義母の甘い尻しつけ

った。

最初こそ半ば強制されるような気持ちだった直樹だが、いざ、耳かきを味わうと数分で気持ちよさに身を任せるようになっていった。

「ねえ、直樹クン……、動画の耳かきと今どっちがイイかしら？」

カリカリッと耳を丁寧に搔かかれ髪を撫でられながらそんな質問をされる。

このころには直樹はもう耳かきに夢中になりはじめていた。

「……い、いませす」

何も嘘をつく必要はない、心身を安堵させる心地よさを受けて直樹は素直にそう口にした。

僅かな時間だがこの心地よさは疑似的な体験とは比べ物にならないと感じる。

「ふふっ、ありがとう」

おでこがイイコイイコとばかりに優しく撫でられていく。

膝と頭そして耳に感じる包まれるような心地よさは、音声だけの耳かき動画では絶対に味わえない温もりが存在していた。

「あつ、チョット大きいのが…、んっとれそうだから、少し我慢してね」

耳元でそう優しく囁かれると、耳中でコリッと微かな痛みが発生する。

「っっ」

しかしそれも一瞬で終わり、すぐにカリカリッとケアをするように内耳が優しくこすられて痛みはほぐされていく。

「ヨシ、とれたとれた、よく我慢したね〜偉い偉い♪」

耳かきを穴から抜き取られて、優しい声で褒められると頭を撫でられる。

その柔らかな雰囲気直樹は肉体をゆだねるように力を抜いていった。

カリカリコリコリ、再び耳かきが再開される。

ゆったりとした沈黙がしばらく続きその空気に直樹が浸っていると、

「……ねえ直樹クン、わたしのコト嫌いかしら？」

ぼおとした頭にそんな言葉が投げかけられた。

「！、……そ、そんなことはないです」

魔性義母の甘い尻しつけ

ドキリとした直樹だが、正直な気持ちに口にする。
優しくしてくれる義母を自分が嫌うはずがない。

「じゃあどうして、わたしのことを避けてたのかな？」

丁寧な耳の穴をこすられながら質問は続いた。

「えっと、それは……」

ぼやけた思考の中でもこれまで自分が義母から距離をとっていたことを指摘されて気まずさがわいてきた。

「うん大丈夫、大丈夫、ほらなんとも思わないから言ってみて……」

だが優しく頭が撫でられてうながされると、気まずさもすぐに薄らいでいった。

「え、っと」

「大丈夫よ」

一瞬だけ、ためらいが生じたがなんでも許してくれそうな雰囲気と耳の心地よさに口と心が緩んでいった。

「僕、人見知りだし、あんまり母親ってどんなものかわからないから……」

「うん、うん」

義母は耳かきのカリカリとしたリズムに合わせてうながすように優しく相槌をうつ。

「だから、美紗さんの優しい態度が本心なのかなってちょっと怖くなっちゃって、」

「そう、……だったのね」

雰囲気流されて思っていたことを吐露すると、すぐさまこんなことを言ってしまうてよかったのかと不安になってきた。

「あっでも——」

「大丈夫よちゃんとわかってるから……、不安だったのよね」

決して嫌っていたわけではないと言おうとした直樹に、義母は安心させるようにひたいを撫でた。

「……これからはもう少し心を許して、甘えてもいいのよ……」

「う、うん……、でも」

「直樹くんは今までお母さんに甘えられずに生きてきたでしょ？」

心に入りこむようなその言葉は慈愛に満ちたような優しい響きだった。

魔性義母の甘い尻しつけ

「……………」

コクリと頭を振ろうとしたが、耳かき中だということを思い出して無言になる。

「だからその分は……ちょっとづつでいいから、わたしに甘えてくれると嬉しいわ」

耳元で内緒話をするように優しくささやかかれて、直樹は心の中の鬱屈が少しだけとけるような感覚を覚えていった。

「音声動画なんかじゃなくてね♪」

「ううっ、それはっ」

そして湿っぽさを和らげるようにいたずらっぽく付け加えた彼女の言葉に直樹は甘えるように口をとがらせた。

「ふふっ冗談、ほら次は反対側よ、コッチを向いてね〜」

からかうように笑って告げる義母に、直樹はもう片側が終わったのかとちよつとだけ残念な気持ちになった。

同時にほとんど痛みを感じないで耳の中がキレイにされたことに驚く。

耳はスッキリとしており義母の手際よさ、圧倒的な耳かきの上手さがハッキリと理解できた。

「凄く上手い美紗さん、……気持ちイイ」

直樹は温かい気持ちにほぐされて思わず感情のこもった本心が口からこぼれ落ちた。

すると一瞬、乗せた顔が揺れるほど義母の太ももがブルリッとする音がした。

「?」

「んふふっ、ほら反対、お顔はコッチ」

義母の股間を中心に発生したふるえ、それに疑問を覚える間もなく温かい手が伸びて直樹の頭をゆっくりと内側にむけた。

反対側の耳が上に向けられて自然と顔が義母のお腹へと向く。

直樹の視界には細いウエストを覆う白いシャツと、たくし上げた薄桃色のスカートがうつる。

魔性義母の甘い尻しつけ

さわやかな色彩に温かい体温。

身体のほうに顔を向けられたことにより意識がより一層包まれるように感じられた。

気のせいなのかそれともスカートの色合いに影響されたのか、心なしか義母の下半身から甘い桃のような湿ったニオイが漂う。

それは脳にしみ込んで安心感とは別の何かを呼び起こすような不思議な香りだった。

「じゃあコッチ側も……、気持ちよ〜く癒やしてあげるからね」

甘い香りに誘われて別の刺激を追いかけそうになった直樹を、なだめるように義母の優しい声が耳に流れ込む。

ヒンヤリとした感覚で外耳^{がいじ}を丁寧にぬぐわれて、入り口近くまでこそぐようにウェットティッシュで拭き取られる。

それが終わり耳がサッパリとすると、またカリカリリツと絶妙なタッチで耳穴がこすられていった。

春の日差しのように柔らかく手が髪の毛を梳^すいていき、巧みに耳かき棒が心地よさへと誘っていく。

そんな母性のような優しさに包まれた直樹は次第に追いかけてそうになった香りと刺激を頭から抜けさせていった。

鼻息を少しずつ落ち着かせていった少年の横顔を眺めながら、美紗は軽く安堵した。

(あぶなかったわ……)

危うく性的な刺激を彼に与えてしまうところだった。

蕩^{とろ}けそうな顔で美紗の名前と一緒に気持ちいい、とつぶやいた少年に思わず股間がうずいてしまった。

ジンワリと湿ったものがあふれてしまい、その匂いを嗅がれてしまった。

性に敏感、だがまだ発達しきっていない少年は幸いなことに女のフェロモンに完全には食いつくことはなかった。

寸前で美紗は耳かきの巧みさで、なんとか股間のニオイに夢中にさせるの

魔性義母の甘い尻しつけ

を誤魔化すことができた。

性的に意識させるのはまだ早い、まずは失っている母性を満たさせてから信頼させていく。

そうしてジックリと自分に虜にさせていくのが美紗のやり方^{スタイル}だった。

決して早急には事を運ばない、ゆっくりと自分の好みに育て上げていくのだ。

美紗は優しく少しでも痛さを発生させないように、巧みに耳を搔^かいて詰まった耳垢を取り除いていく。

すでにソファアのひじ掛けに広げているティッシュには大きい黄色い塊がいくつも転がっていた。

耳かき動画にハマっているのに自分ではまったくしないで、こんなにも耳垢を溜め込んでいるのがおかしい。

気持ちよさげに目を細めて耳かきを受ける少年、そんな初々しい姿に美紗のいたずら心がムラムラとわき上がってきた。

こんな短期間の耳かきだけで夢中になって心を許しているのだ、少しはいたずらしても大丈夫だろう……。

「あら、細かいのが……」

美紗はそう小さくつぶやくと、彼の耳に唇をよせてとがらせた。

「ふうふうふうふう」

耳かき棒を抜き取ると耳の穴に向かって細くした吐息をゆっくりと吹きかけていく。

「ひっ、ひやっあ」

当然のごとく、まったく予想していなかった少年は可愛らしい声を上げてビクンと身体を跳ねさせた。

「ころら、じっとして」

優しくたしなめるようにそう囁くと、ふたたび唇を近づける。

「小さいのが、ふうふうふうふう、まだ残ってる、ふうふうふうふう」

ささやいて息を吹き込むたびに、ビクッビクッと小さく動く少年の肉體。

魔性義母の甘い尻しつけ

「うごいちゃだめ、ふうふうううう〜」

「ひ、ひゃああっ」

耳を軽くつまんで叱りつけるようにささやき吐息でからかってやると――。
(あら?)

相変わらずビクビクと反応をしめす少年のカラダだったが、最後の時だけなぜか下半身だけをふるわせたような挙動になっていた事に気が付いた。

(この子……)

最初に会ったときから、薄々感じていたことだが――

今度は耳を強めに引っ張ると、もう片方の手を少年の腰へと伸ばしていく。
そして、

「こら、うごくなって言ってるでしょ〜」

「ひいやっ」

耳もとで少し低めの声で強めにささやくと小さなお尻をキュッと指先でつねりあげた。

瞬間、少年の腰が今までで一番大きくはね上がった。

(やっぱり……、素質があるわね)

つねり上げた指をはなしても腰をくねらせるようにモゾモゾとさせる少年に美紗は確信を覚えた。

(当たり前)

少年の反応はとてもいい……、好みの匂いがする。

「ううっ美紗さんっ、痛い、なにするんですかあ」

秘境から宝物を見つけたような気分になった美紗だったが、彼の声に我に返った。

「あっ、ごめんね冗談よ、冗談、……痛かったよね？」

足をまげて身体を硬くさせた少年の頭を優しく撫でると耳かきを再開させる。
る。

カリコリカリカリッと今までよりも気持ちよさを優先させるように耳をくすぐって彼のふたたび湧きあがった警戒心をほぐしていく。

(調子に乗りすぎた、まだ早かったわね……)

この少年との時間はいくらでもある、ゆっくり少しずつ掘り起こしていこう。

魔性義母の甘い尻しつけ

そう決めると美紗を唇をなめて手元の耳かき、頭を撫でる手つきに専念していった。

“うん、取れてる、取れてる、気持ちいいね……” “よしよし、そう力ぬいで、全身をリラックス…” “大丈夫、もっと身をゆだねちゃおうか、耳かき心地イイね…”

耳元でコショコショとささやき少年の意識をほどいていく。

ゆっくりと時間をかけて、ささやきをおり交せて丁寧な耳かきをしていくと、ほどなくして彼のまぶたが下がっていった。

少年はおそらく昨夜あまり寝付けなかったというのもあるのだろう。

だが、それとは関係なくここまで丁寧に癒やしに徹した耳かきを受けて意識がたもてるわけがない。

美紗の耳かきはそれほど癒やしに徹していた。

膝の上でスースーと寝息を立てて眠りに入った少年から耳かきを抜いていく。

(眠ったわね、じゃあここから——)

おでこを優しく撫でながら、美紗の反対の腕が下半身へとゆっくりと伸びていく。

(コッソリと仕込んでいこうかしら……)

その白い手は無防備になった少年のズボンの中へとスルスルとなめらかに潜り込んでいった。

眠っている少年を起こさないように。

そう、美紗が本当に優れているのはここから先なのだ——。



義母に耳かきを施された直樹は、日常でも彼女に少しずつ心を許すようになっていった。

最大の要因は、週に一度してくれるようになった耳かきにある。

直樹は義母が耳かきをしてくれたのは、その時の気まぐれだと思っていた。

魔性義母の甘い尻しつけ

あれが最初で最後なのだろうと……、
だがそれは違っていた。

ヘッドホンでああいう音声を聞くのは耳によくないから、代わりに自分がやっていると提案してきたのだ。

願ってもないことだった。

直樹にとってあの体験は音声動画なんかとは比べ物にならないほど心地よかった。

失っていたものが埋まっていくような充実した気持ちよさ。

これまで親に甘えたことのない直樹にとって包み込まれるような安心感とはでは得られないものだと感じていた。

それを義母は定期的にしてくれるというのだ、拒否することなど考えられなかった。

ただ耳かき中に、意地悪な瞬間があったことが気にかかった。

遊ばれているような危ない感覚。

それでも、あの母性的な癒やしの前では些細なものだと受け流した。

そう感じるほど直樹は義母の耳かきに心を奪われていた。

期待通りいやそれ以上に週に一回恒例となった耳かきは、直樹に至福の間をもたらしていた。

義母はいつも丁寧に耳の穴を掃除してくれて、優しくささやきかけて安心させるように頭を撫でてくれた。

まさに母性であり、生まれてから得られてこなかった欲求を満たしてくれるような心地のよさがあった。

庇護されるような安心感に身をゆだねているとすぐにウトウトとした眠りに落ちてしまう。

すべてを許してくれて温かなまどろみの世界へと落ちていく。

それは今までの疑似的な音声動画では味わえなかった至福といえるものだった。

一回二回、三回と回を重ねるごとに安心感は増していき眠りと一緒に耳かきの沼へと沈んでいく。

魔性義母の甘い尻しつけ

ただ毎回毎回、寝落ちするのが当たり前となっていた直樹に、少しだけ困ったことが起きるようになっていた。

回を重ねるごとにムラムラとした気持ちが沸き起こるようになっていた。不思議だった、なにもイヤらしい事は考えていないのに下半身に勝手に血が集まっていき軽く股間がもりあがってしまうのだ。

心や体は癒やしを求めているはずなのに、義母に膝枕をされて彼女のニオイをかぐとジンワリと熱が沸きあがってくる。

当初はふくらんだ股間を見られたらどうしようと、ドキドキとしていたがどうやら義母は耳かきに集中しているのか気づいていないらしかった。

それに興奮は強い性的な欲求へとはつながらず、あくまでもトロ火で煮だつていくようなゆるい感覚で終わる。

すぐに耳かきの心地よさがそれを上回っていき眠りに落ちていく。

そのため直樹は次第にその下半身の異変を気にしないようになっていった。

——それが義母の仕込んだ罠だとも気づかず……。



新学期がはじまりひと月ほどたった。

西岡家の生活はガラリと明るいものへと変わっていた。

新しい学校生活、義母との同居生活は順調で最初に感じていたネガティブな気持ちは何だったのかと思えるほどだった。

直樹が気持ちよく生活を送れる主な要因はやはり義母の存在にあった。

耳かきをきっかけに関係は変化して彼女を完全に受け入れるようになっていた。

親しく世話を焼いてくれる義母、心を許した彼女と一緒に暮らしていると自然と楽しくなってくる。

食べるものもよくなったからか、体調がよくなり心身ともに健康になった。おかげで学校や塾では見違えるほど調子よく勉強に精をだせた。

それは仕事をしている父も一緒なのか家に帰ってきてからよくしゃべるよ

魔性義母の甘い尻しつけ

うになっていた。

今ではたまに買い物に行ったりするくらい直樹は美紗と打ち解けていた。家族の生活は義母を中心に華やいだ暮らしへと変わっていた。

そんな生活の中で直樹をより夢中にさせていたのは、やはり耳かきだった。週末の父親がいない時間帯に行われるその行為は、秘密じみて特別な事をしてもらっているような気持ちになる。

今日もまた直樹は、義母からそんな秘めた寵愛を受けているのだった……。

いつものように彼女の膝の上で直樹は横になりながらウトウトと眠気を催していた。

身体はソファアの上で胎児のように丸まっている、この恰好が一番落ち着くのだ。

耳かきはこれでもう五回目くらいだろうか？、何回受けても毎度毎度この眠気には抗えない、抗う意思もないが……。

意識がボンヤリと薄らいでいた直樹だが、今回は下半身を感じる浮遊感がいつもより強かった。

なにか温かいものでジンワリと包まれていき、とかかれているような気持ちのいい感覚。

それにより股間の奥からにじみ出る様な甘酸っぱさ。

それらは白いモヤのような眠気とまじりあい沈殿していく。

ゆっくりと落ちていく意識の中、知らず知らずのうちに直樹は股間をさらに弛緩させていった。

「おきクン、なおきくん……、起きて」

ああ、また眠ってしまったのか……、まどろみの中、義母の言葉が聞こえてくる。

直樹は少しずつ意識を取り戻していった。

「ほら、起きなさい、起きて」

そんな言葉に顔を上げようとすると、ひたいに置かれていた義母の手がそれを止めるように顔を膝の上で抑えていた。

魔性義母の甘い尻しつけ

寝起きの意識で直樹はどこか硬い義母の口調と、顔を固定されている現状に疑問がわいた。

「?」

耳に残る微かな耳かき棒の感覚。

いつものように耳かきが終わったのかと思ったが……、まだ続いているのだろうか？

顔は彼女の膝の上でテーブルの方へと向いており視界が固定されている。力の抜けた身体はソファーにぐったりと沈んで動けないでいた。

そんな緩んだ身体を起こせずに意識だけを目覚めさせた直樹の耳に、義母の声が流れ込んできた。

「……ねえ直樹クン、なんだかソファーが濡れているんだけど？」

凪ないだ海のような静かな声。

いつもの柔らかい口調とは違い、冷たく硬い響きによくない異変を感じ取る。

実態を把握しようにも顔を膝の上で固定されているため動けない、直樹は戸惑うことしかできなかった。

「えっと、それって……」

「自分のズボンの前を触ってみて、」

淡々と冷えた声でうながされて、直樹の頭にイヤな予感が芽生えてきた。

「あの……」

躊躇する直樹に、

「早くしなさいっ」

「ひっ」

聞いたこともないような叱責が飛ばされてビクリと身体がふるえた。強い命令とも言える言葉に従って、手を自らの股間へともっていく。

すると――、

「ああっ!、……これっ」

ヒンヤリとした液体の感触、股間部で何か布地を濡らしている。

「そう動かして……、その下のソファーまで触りなさい」

有無を言わせない冷めた命令に従って、手をなぞりながらズボンから横た

魔性義母の甘い尻しつけ

えるソファアへとはわせていく。

ジンワリとした湿り気が細い線のように流れて股間からソファアを濡らしていた。

現状を理解していくと顔から血の気が引いていく。

そんな直樹に上から硬質な言葉が降り注いできた。

「それ何？ なんなのかしらその濡れた染みは？」

耳に流れ込む義母の冷静な言葉に心臓がギュッと縮みあがった。

「こ、これは……」

改めてなぜ下半身が濡れているのか、直樹は股間へと意識を集中させる。

内股になってキュッと引き締めた股間の感覚から欲望がパンパンに溜まり

こんだような圧迫感を感じ取った。

感覚からは何かをもらしたという感じはまるでない、だが実際に股間は濡れている。

状況に追いつけずにいる直樹に義母がつぶやく。

「お漏らし……、オネショかしら？」

スンスンと鼻を慣らす音が聞こえる。

さすがにおもらしとなると自分でもわかる、直樹は強く否定しようと声をあげた。

「あつ、違っ、いつ」

「動かないでっ、……まだ耳かき中よ」

身体を起こそうとした直樹の耳中にゴリッと微かな痛みが走る。

なぜか義母はまだ耳かきが終わっていないと、この状態で動くことすら許してくれなかった。

「耳かきの最中に、いったい何を漏らしたのかしら？」

「ううっ、そ」

「ニオイはしていないわ、どうやらオネショじゃあなさそうね」

義母は探るように追い詰めていくように言葉を続けていく。

「じゃあ、」

ドクドクドクつと直樹の心音が早鳴る。

魔性義母の甘い尻しつけ

「お射精かしら？」

「——ち、違いますっ」

美しい義母からでた「射精」という言葉にドクツと一瞬鼓動が高鳴ったが慌ててそれを否定する。

なぜなら射精した後の解放感も独特の気だるさもまるで感じなかったからだ。

「だったらなにかしら？」

耳かき棒を耳に残されたまま顔を固定されて冷たく質問される。

あれだけ優しかった義母に責めるように質問をされて、

今や自身の痴態ともいえる股間の染みよりも直樹はこの状況に頭がいっぱいになった。

義母は今どんな顔をしているのだろうか？ 直樹は見えない感情に羞恥よりも得体のしれないものを感じていた。

——恐怖とも違う感じたことのない別のなにか。

「ほら言いなさい、このお漏らしは何？」

義母の膝の上で直樹は言葉と状況に追い詰められて理解をあきらめた。

「ううっ、わ、わかんないっ……です」

泣きそうになりながら直樹はそう答えるしかない。

何かが張りつめそうになっている股間、その感覚は小水や精液を漏らしたような解放感がまるでない。

むしろその寸前で止められているような感覚があった。

性に浅い思春期の少年は今の自分がどんな状態なのかハッキリと自覚できずにいた。

「そう……しようがないわね」

戸惑い硬直する少年の耳に、美紗の冷めた声が流れ込む。

「なら私が教えてあげる、直樹くんそれはね——」

顔を抑えられて、耳かき棒を差し込まれたまま直樹はゴクリと喉を鳴らした。

「我慢汁よ」

決して優しくない淡々とした声が答えを告げる。

魔性義母の甘い尻しつけ

それは直樹の薄い性知識でも知っているものだった。

「が、がまんじる……」

精液が出る前に出てしまうヌルヌルとした透明な液体、だがこんなにも染みが垂れるまで出るものなのか？

直樹の湧き出した疑問を無視して義母は言葉を続けた。

「先走り汁、カウパー腺液、他にも色々と呼び方はあるけど要するに——」

女教師の講義のように淡々とした声で説明をする義母は一度言葉をきると、ゆっくりと耳のそばに唇を寄せた。

「我慢できなくなつて漏れたエッチでいやらしい、お・し・るってことね」
言い聞かせるように低い声が耳に流し込まれる。

その冷たくも色っぽい響きに一瞬ゾクリとした震えが直樹の首スジをふるわせた。

その瞬間——

「ふうふうふうふう……」

首スジに冷たい吐息が吹きかけられた。

「ひっ」

「ダメよ、動いちゃ、あぶないでしょ？」

全身に流れ込むようなゾクゾクとした感覚に身を震わせようとした少年は顔をがっちりと捕まれて耳中にグリツと痛覚を与えられて肉体を硬直させた。

「ねえ直樹クン、キミは耳かき中にイヤラシイことを考えていたの？」

たたみかけるように冷たく詰問される。

「そ、それはっ」

耳に入っている棒が僅かに痛覚を感じる場所を抑えており、顔をがっしりと固定されている。

まるで全身が縛られているような動けない状況での質問に直樹はなぜか妖しいゾクゾクとした感情を感じだしていた。

「正直に答えなさい母親の耳かきで欲情したのかしら？」

「し、してないっ、してないよお」

問い詰めるような言葉に直樹は身体を縮ませながら泣きそうな声でそう答えた。

実際、眠気におそわれて意識がない状態で起きたことであり、いやらしい気持ちなどなかった。

魔性義母の甘い尻しつけ

「ううう、いやらしいことなんて考えてない…デスウ」
だが正直に答えた直樹に対して義母は容赦しなかった。

「ふうん、だったらコレはなに？」

そう冷たく言い放つと、顔を固定していた手をはなすと直樹のズボンへと伸ばしていく。

「股間がふくらんでるじゃない…？」

ささやきと一緒に長く白い腕が、小さく丸まった背中を通り過ぎてズボンのウエスト口をつかむ。

「ここ、どうしてこんなに勃起してるのかしら？」

淡々とした口調でそう言いながら布地を引っ張り上げた。

「あっ」

ふくらんだ股間が晒されるようにズボンでこすり上げられる。

「染みをつけて、ペニスを勃たせてこれで欲情していないとか——」

「あっ、ああっ、やめっ」

クイクイツ、クイツと巧みにペニスをこするように布で操りながら耳に口を寄せる。

「信じられないわ」

ぼそつと一言そうつぶやくと義母の手がズボンを勢いよくズリ下げた。

「ああっ——」

ひざ下までズボンが脱がされて下着一枚にされる。

「パンツもぐっしより、…：やらしい」

ふくらんだ下着のテントの周辺に小さくない染みが滲んでおり、それが証拠とばかりに義母は勃起したペニスをさらしあげた。

「そ、それえっ」

「いやらしいけど…：、ここは正直ね」

ねっとりとした痴態を煽るような言葉の色っぽい響きに直樹の全身がジワジワと熱を帯びる。

その体熱が濡れた下半身の情けなさをさらに際立たせた。

「や、やめっ、てえっ」

なぜ耳かき中に寝ながら我慢汁を垂らしてしまったのか？

なぜ今こうして責められながらも勃起がおさまらないのか？

魔性義母の甘い尻しつけ

自分ではまったくわからない直樹はそれを煽っている本人に辞めるように哀願するしかなかった。

「ううっ、も、もうっやめてっ、み、美紗さんっ——あうっ」

「こらっ動かないっ、耳が傷つくわよ」

しかしグリッと耳中が無慈悲にこすられる。

強烈な羞恥も合わさって耐えきれなくなり顔を起こそうとしたが耳かきが強制的にそれを咎めた。

耳穴を中心に義母に全身を拘束されているような感覚。

混乱、羞恥、畏怖そして——

少年の未成熟な肉体は得体のしれない妖しい感覚を覚えはじめていた。ゾクゾクッと背筋から小さなふるえが起きてくる。

そのアヤシイ肉体的変化を見透かして、更には煽るように、

「耳かきでエッチになるなんて、ふううううう〜、最低よ」

義母の冷たい声と吐息が耳朶を責めたてる。

ジィワツと思考がとけて、股間へと熱が流れ込んでいき直樹のパンツが大きくゆれる……。

「ああうっ」

「まあた……」

真っ赤になった直樹の耳にくっつくように唇があたり、

「ペニスふるえていやらしい染みがひろがった、……はぁ」

冷たい指摘の後、呆れたようなため息をつかれて、

「これはお仕置きね」

「ひやっ」

冷淡な言葉と一緒にパンツの上からギュッとお尻がつねられた。

鋭い痛みが臀部に走り背筋が伸びる。

反応するように首から上が動こうとしたが、またもグリッと鼓膜近くがこすられて動きが制限される。

「ひ、ひっっ」

喉からもれる悲鳴にも似た声、強い被虐の感情が直樹を支配していく。

「オシオキなの、動いちゃダメ……」

魔性義母の甘い尻しつけ

あんなにも優しくかった義母は今や冷たく、そして魅了する色香をにじませている。

「我慢しなさい……」

低い柔らかな口調だったが抗えない魔力のような響きが耳朶をふるわせる。

そしてつねられたお尻の指がほどかれると、スルリと下着の内側に手が忍び込んできたのが感じ取れた。

「あつ、ひっ」

丸まった尻タブに五本の細い指がゆっくりと食い込んでいき思わず声もれる。

その内も近くのお尻肉に軽く爪が立てられると、線を引くようにゆっくりと指が引かれていった。

「ひいひゃああつ」

尻肉が持ち上げられるように爪で引っ搔かれていく。

本来なら痛いはずの鋭い刺激だったが、直樹は――

「どうなってるのかしら？ まだテントがヒクヒクしてる」

ゆっくりと食い込むような尻肉を爪で引っ搔かれてペニスをビクビクっと悦ばせていた。

「ほんと、どうしてこうなるのかしら？」

止まらない直樹の痴態に呆れた言葉がつぶやかれる。

「……ちよつと見せなさい」

冷たく命令するような口調でささやいた義母はお尻の手をパンツにかけた。ウエスト口のゴムに指を巻いて引っ張るとスルリとさげる。

「あつだめっ――」

最後の一枚を脱がされてプルンツといきり立った棒が姿をみせた。

しかし今度はズボンの時とは違いズリ下ろさずにめくるだけ。

股間のふくらんだペニスだけがあらわになる半脱がせ状態。

ボクサーパンツのゴム口がペニスの根本、睾丸でひっかかるような中途半端な脱がせ方だった。

「あらあ？ 直樹クンこれお帽子かぶって、……包茎じゃない」

魔性義母の甘い尻しつけ

「ううっ」

どこかからかうような口調でそう言うと、腰ゴムをクイクイツと引っ張って肉棒を揺らしてきた。

「パンパンにして、あまった皮の先っぽからお汁を漏らして……」

未成熟でありながら真っ赤になってふくらんだペニスはゴム口で根本を揺すられて先口からタラリタラリと透明な糸を引いていった。

お尻をソファーに横たわらせている少年のソコ、

——余った皮の間から透明な汁が流れ落ちていく。

「あららまた垂らして、……ソファーに染みができるわ」

義母はソファーで耳かきをしながら、パンツを半脱ぎにさせて勃起する直樹を言葉で責めたてていった。

「いやらしい子……」

ビクンツとペニスが跳ねた、異様な興奮だった。

羞恥が興奮に変わってしまう状態に直樹は鈍った思考で危機感を覚えた。

なぜだかわからないが、これ以上責められると取返しがつかないような事態になってしまう。

これは絶対に覚えるてはいけない性感だ。

残った常識が警鐘を鳴らして、直樹は口を開く。

「もうっ、恥ずかしいっ、ですっ、やめてくださいっ、ううっ」

未成熟な性がアブノーマルな興奮にギリギリで抗っていた。

動けない直樹は、義母の膝のうえで顔を真っ赤にさせて懇願した。

「ううっこんなのイヤ……」

どうしてこうなってしまったのかよくわからない、だが至福だった耳かきが恥ずかしいものへと変わっており身体が興奮してしまっている。

それを直樹はまだ残っている理性で必死に拒絶しようとしていた。

ぎゅっど肉体を硬直させる。

それでも義母の責めは止まらないだろうと覚悟していた直樹だったが、

「ごめんね？ やっぱり恥ずかしいのはイヤよね……」

一転して優しい口調が耳に流れ込むと、ゴム口を揺らす指が離れてパンツの締め付けを開放した。

魔性義母の甘い尻しつけ

「うひゃっ」

代わりになめらかにパンツの中、お尻の谷間に手が滑り込んでくる。

「優しく耳かきをされたほうがいいのかしら？」

そうささやきながら、もう片方の手がいつものように耳かきを再開させた。

「ゆっくりと丁寧にこうやってカリカリやってなぞってあげてえ、」

心地よくなるいつものリズムで耳中を棒がこすっていく。

「いつものみたいに、」

「あっ、ああ…」

「癒されるのが、好きよね？」

「は、うっ…」

言葉どおりお馴染みとなった巧みな耳かきが耳朶をくすぐり、直樹をうっとりといつもの世界へと導いていく。

数回にもわたる耳かきの成果なのか、身に染みている癒やしの感覚に抗えずに自動的に身体から力が抜けていった。

求めていた心地よさが与えられて反発心が手懐けられていく。

しばらく猛烈に股間と耳への癒やし^たが、反発しあっていたが意識は少しずつ耳へとうつっていった。

時間とともに耳かきに夢中になりだした直樹だったが、お尻の割れ目には義母の手がいつの間にか侵入していた。

その細長い指が谷間を細かく、くすぐる。

「はひゃっ」

「直樹クンでも耳だけじゃないわ…、キモチイイのは」

いつもの落ち着いた優しい声が耳に流れ込む。

それは先ほどまでの冷たい響きとはまるで違い、その落差から直樹は強い安心感を覚えた。

戻ってきた義母の甘やかしにすがりたくなる。

そんなクセになりそうな欲求をかいなでするように甘い声は続く。

「こっちも…、耳穴みたいにコリコリッてするとお…」

「ああっんっ、そ、そんなとこっ——」

割れ目の指がおそらく人差し指と中指が内側ギリギリ、すぼまりのすぐ横

魔性義母の甘い尻しつけ

に軽く爪を立てて引っ搔いた。

「嫌？ でもすっごくくきモチイイのよ？」

「あっ、あっ、ああっ」

お尻の割れ目にそって二本の指がなぞりながら何度も往復していく。それと合わせるように、逆の手が耳穴の心地いい内壁をカリカリいっとなぞる。

「ほらカリカリカリッて大好きでしょ？ ふふっ」

耳の穴は直樹の気持ちのいい箇所を細かくくすぐり、

もう片方の手は、お尻の谷間にある指ですぼまりの横をギリギリでよけるようになぞっていく。

「あうっいいい……」

耳かきの気持ちよさにうっとりしていると、時折からかうように爪先でお尻の門が擦れていき何とも言えないジワッとした熱がうまれる。

「あうっそ、そこっ」

「どう？ こっちもいいのよ」

耳だけではなく無視できない甘味がお尻からわきあがってくる。

「こーやってうまあ〜く穴をほじってあげるの、私が得意なの知ってるでしょ？」

耳朶に流れ込む優しく甘い声。

その言葉を証明するように耳かき棒が器用に耳の奥で動く。

「ココも同じように……、いえ、同じ以上にあま〜くコリコリッてかいてあげちゃうわよ」

優しく繊細に搔く耳穴の動きに合わせて、今度はお尻の谷間の指が初々しい菊花をくすぐった。

「ふふっ、耳よりずっとキモチいいかも？」

「あっ、ああんっ」

甘くからかうようにお尻の奥で細い指が直樹を惑わせてくる。

「病みつきになっちゃう……」

連携するように気持ちいい耳かきと甘い言葉、お尻のからかいが直樹の理性をとかしてくる。

「コッチの穴、たくさん可愛がってアゲルわ」

「あっ、いいっそこっも」

魔性義母の甘い尻しつけ

お尻の穴表面が指の腹で優しくスリスリと撫でられて、ほわほわとしたアヤしい気持ちよさが下からわく。

「どう？ ……してみる？」

「あっ、あっ、あうっ」

ゆっくりと丁寧に菊門を撫でると、爪を少しだけ立ててクリッと軽く引っ搔いた。

「お・し・り♡」

ジワリとバターがとろけるように菊門が緩んだ。

「…、あっ、う、うん」

口から肯定の言葉が細い涎と一緒にこぼれおちる。

未知の性感に惑わされて、未熟な性が誘惑に抗えるはずもなかった。

「ふふっ、決まりね」

義母の余裕のある言葉が耳にながれると、耳かきがスルリと穴から抜き取られた。

「下を向いて直樹くん、ふふふ、つられてソコもすぐお悦んでるわ」
からかうような響き。

直樹が言葉に従い下を向くとヒクヒクとふるえて先っぽの皮口からヨダレを垂らす勃起したペニスが目につつた。

パンツのゴム口が陰囊と陰茎の間に引っ掛かり根本を締め付けていたが、なにもしていないのに勃起したソレは気持ちよさそうにヒクヒクと上下に揺れていた。

何かを期待するように待ち望むように――。

「エッチなペニスね、そこもキモチよくなりたいの？」

自覚した欲望を色っぽい声で指摘されると、ふたたび指がウエスト口をひっかけて陰棒を揺らした。

「ああっ……」

「いいわよ、おしりと一緒に可愛がってあげても……」

耳元で微かな吐息と一緒に甘い言葉がささやかかれて直樹の肉体がジワジワと熱を帯びだした。

股間を中心にあふれ出る興奮を抑えきれなくなっておりパンパンにペニス

魔性義母の甘い尻しつけ

は膨れ上がっていた。

これ以上ないと思えるほど張りつめた肉棒。

いつの間にか性感を手玉に取られて射精欲は最大まで高められていた。

——もうイキたいっ、そんな切実な直樹の耳に唇が近づいた。

「でも、今日はまだダメ」

小さなつぶやきと同時に、パンツのゴムが引っ張られるとスルリと太ももまで脱がされた。

「あっ」

そして——

「オシオキよ」

冷淡な声が耳元で響くと、お尻の皮膚が指で強く挟まれた。

「ひ、ひゃっああっ」

お尻がひっぱられるようにギュウ〜ウウつとつねられると、

「ほら——」

持ちあがった尻タブに鋭く鮮やかな平手が一発打ち据えられた。

パァーンと乾いた音が鳴り響く。

「切なくイキなさい」

「あひゃっああっ」

平手を打った手はすぐさま指を二本立てるようにして直樹のお尻と睾丸の間、会陰部に潜り込む。

ブルリッとお尻を中心にしてふるえが全身に伝わっていく。

そして、そのふるえの波が首筋から耳元まで到達すると、

「……漏らしなさい直樹」

低く冷たい言葉が真っ赤な耳に流れ込んで、同時に会陰がゆっくりと指先で揉み込まれていった。

細くなめらかな指が白い欲望を押し出すように精巣を揉むように刺激していく。

「あっ、あっあっ、あああつ————」

指先からの甘い刺激に、ふるえるペニスの先っぽからトロリトロリと真っ白な液体があふれだした。

魔性義母の甘い尻しつけ

(な、なにこれっ、なにこれっ)
期待した解放感がまるで感じられないまま、直樹は精液を漏らしてしまっ
た。

いやさせられた。

被った包皮の先から漏れ出すその白濁をさらに押し出すように義母の細い指はグリグリと容赦なく睪丸の真下を押し込んでいく。

「あっ、ああっ、これっ、なんかっ、いやあっ」

顎を上げて戸惑うような声をあげるその顔には気持ちよさとは真逆の切なげな表情が浮かんでいる。

「ふふっ、じれったい？　しょうがないわよこれはお仕置きなのだから」

人差し指と中指をねじるようにして会陰をほぐしながら、耳元で義母が愉しそうにささやく。

「ああっ、なんでっ、止まらないっ、ううっ」

トロトロと漏れ出る液体は、直樹の意思を無視して太ももを濡らし、更にその下へと垂れ落ちていく。

「あららっ、ソファァーを汚したお仕置きなのに……」

「あっ、やだっ——」

グリッとひととき強く会陰を押し込んだ義母は手を離すと——

「白いので、もっと汚しちゃったじゃないコレ」

ギュッと漏れ出た白濁を搾り取るようにペニスをその手が握りこんだ。
ドブリ。

白い手があふれた残液を丁寧に搾りつくす。

「あっ、んっあ、そこおっ」

はじめて他人にペニスを触られた直樹はその衝撃に心臓を跳ねさせた。

「やっばりいやらしい……、ほら直樹」

義母はギュッと皮が先っぽであまったペニスをつかむと顔をよせた。

「返事をしなさい」

「は、はい……」

冷たく静かな声で叱りつけられるように感じて恐る恐る返事をする。

いつの間にかクン付けが外されていたが直樹はそれが当たり前だったかの

魔性義母の甘い尻しつけ

ように受け入れていた。

「気持ちよくなりたかった？」

「ううっ、は、はいっ」

握りしめた肉棒が柔らかく手で揉み込まれる。

白いしなやかな握り手は、この先の快樂を与えてくれるかのように心地よさを伝えてくる。

だがゆっくりと揉みながら焦らすように決して先を与えない。

「……ふふっでも今日はもうおしまい」

「ううっ、そ、そんなっ」

焦らす手つきと一緒に義母はそんなに甘くはなかった、ゆるやかな刺激を続けたままお預けを言い渡される。

「次まで一週間、我慢しなさい」

一週間の禁欲命令。

「い、一週間……ガマン？」

「そう、絶対に射精しちやダメ、オナニーは禁止よ」

こんな不完全燃焼の状態ですらに射精禁止を言い渡されて直樹は思わず抗議しようと口をひらいた。

「そ、そんなのっ無——あううっ」

無理だと言いそうになった所で、揉み込んだペニスがギュッと強く握りこまれた。

「ソファァを汚した罰よ、それに一週間ちゃんと我慢できたら、」

強く絞られた若い性棒が今度はヤワヤワと緩んでいく。

「——タップリと気持ちイイことしてあげるわ」

白い手が竿を撫でおろすように根本まで移動すると、ふくらんだ睾丸とさらにその先へと指を伸ばす。

「……ほ、ほんとに？」

「ええ、さっき言ったように、おしりに——」

「ああっん」

手首が器用に袋の中を揺さぶり、指先はすぼまりをくすぐっていった。

「ココもいっぱい可愛がって、びゅううびゅううって溜まったものを一気に出させてあげるわ……」

甘い声と巧みな手遊びが直樹をその気にさせていく。

魔性義母の甘い尻しつけ

「信じられないくらいキモチいいわよ？」

膝枕をされながら睾丸とお尻を遊ばれて、耳元で甘く誘惑された未熟な性には抗うすべはなかった。

「だから次までしつかりと我慢しなさい、……いいかしら直樹？」

「あうっ、は、はいっ」

義母の手のひらで遊ばれながら、先の快楽を期待して素直に返事をする少年。

その顔は緩んでおり、もうすっかり義母のご褒美を期待する色欲に溺れただらしない表情だった。

この日を堺に少年はどんどんと堕ちていく――。



直樹にとってそれからの一週間は今までの人生において、もっとも長く感じられた一週間だった。

下半身に残った白い欲望が、日が立てば立つほどズッシリと股間を重くしていた。

もちろん最初の頃は冷静になることもあった。

母親とこんなことをしてはイケない、まともな関係ではないと我にかえる。

ただそんな日はなぜか決まって、義母が密着して無言でお尻をスリスリと優しく撫でまわしてきた。

登校前玄関で、塾から帰ってきてすぐ、食後のキッチンで、

隙あらばと臀部に手が伸ばされた。

そのたびに異常を発しようする思考がグズグズととかされていった。

そして三日目にはもはやそんなことを考える事もなくなっていた、ただただされたいと願うばかり。

すると今度はその日から義母のアプローチはパタリと無くなった。

それから精の欲望が溜まれば溜まるほど、義母への想いそしてご褒美が待

魔性義母の甘い尻しつけ

ち遠しくなっていた。

頭は常に義母のことदैいっばい。

朝食時や夕食時、いつも同じ卓で食事をする美紗がやけに艶めかしくみえて何度も食事中でもアソコを大きくさせてしまっていた。

更には平日の学校でも彼女によるご褒美を妄想してしまい、授業後にしばらく席から立ちあがれなくなることもあるくらい欲情が抑えられなくなっていた。

夜はもつともつらい時間だった。

夕食そして入浴を終えて部屋に戻ると、なぜか急激に下半身が熱くたぎってくる。

思春期の青少年にとっては、今すぐにも握って一発でもいいからスッキリとしたい。

しかし射精禁止を言い渡されている直樹は義母の命令には逆らえなかった。ご褒美への期待と、禁欲を破ってしまった場合の罰が頭をかけめぐる。

罰の内容は聞いていなかったが、もしかしたら二度としてくれなくなる可能性がある。

それが直樹にとって一番恐れていることだった。

強烈な射精欲をなんとか耐えてベッドでまるくなって眠気が訪れるまで我慢をする。

勉強なんて手につくはずもない。

一度気を紛らわせようと、前までハマっていた音声動画にも手をだしたがダメだった。

耳から入ってくる声や音は、以前のような落ち着きをもたらしてくれることもなく、ただただ本物である義母による耳かきを切望させてしまうだけだった。

そしてその流れで、ご褒美やあの切ない吐精を思い出してしまい更なる欲情を加速させてしまう。

ご褒美をもらえる日まで、直樹は悶々とした日々をなんとか耐えて暮らすしかなかった。

魔性義母の甘い尻しつけ

我慢し続け、一日また一日と性欲が積み重なり経験したことのないほど股間がギッシリと重たくなった週末の金曜日、

「ふふっ今日学校から返ってきたら、し・て・あ・げ・る♡」

父が出かけた朝食の場での義母の小さなささやき。

ようやくその約束の日が訪れた――。

体験版はここまでです。

義母のネットリとした調教はまだまだ続きます。

続きが気になる方、いいなと思った方はぜひご購入をお願いします。

式 フロン